

但馬皇女と穂積皇子の歌について

——「言寄せ」の世界——

廣岡義隆

『万葉集』に八首載る但馬皇女と穂積皇子の歌を歌物語として考究したものである。従来から歌物語として見られてゐなかつたわけではないが、それらは歴史的事件を背景として詠まれたものであるとみなされてきた。

本稿は、歌句表現・題詞等の考察を手がかりに、恋愛事件ともかかはらない単なる独詠が、歌物語として発展展開していく相をみたもので、それは藝の「言寄せ」の世界における文学的営為に外ならなかつたといふことを論述したものである。

一 はじめに

集中の、離れ離れとなつてゐる対応する二首を付きあはせることによつて、問答歌を復元しようとしたのは松田好夫氏であつた(注一)。

この潜在問答歌同様に、所在の異なる歌々を繋ぐことによつて一連の詠作を復元しようといふ試みもされてゐる(注二)。ここにとりあげる但馬皇女詠と穂積皇子詠における恋の展開の相も、早くから指摘されてゐる(注三)。

但馬皇女在高市皇子宮時思穂積皇子御作歌一首

① 秋の田の 穂向の所縁 異所縁 君によりなな こちたく有りと

(卷二・一一四)

勅穂積皇子遣近江志賀山寺時但馬皇女御作歌一首

② 遺れ居て 恋ひつつ有らずは 追ひ及かむ 道の阿廻に 標結へ吾

がせ(卷二・一一五)

但馬皇女在高市皇子宮時竊接穂積皇子事既形而御作歌一首

③ 人ごとを 繁みこちたみ 己が世に 未渡らぬ 朝川渡る(卷二・

一一六)

穂積皇子御歌二首

④ 今朝の旦開 鴈が鳴聞きつ 春日山 黄葉にけらし 吾が情痛し

(卷八・一五二三)

⑤ 秋芽は 咲くべく有るらし 吾が屋戸の 浅茅が花の 散り去く見れば(卷八・一五一四)

但馬皇女御歌一首 一書云子部主作

⑥こと繁き 里に住まはずは 今朝鳴きし 鴈に副ひて 去かましものを
あるいは 国に有 (巻八・一五二五)
らずは といふ

但馬皇女薨後穂積皇子冬日雪落遙望御墓悲傷流涕御作歌一首

⑦零る雪は あはに勿落りそ 吉隠の 猪養の岡の 塞為さまくに
(巻二・二〇三)

穂積親王御歌一首

⑧家に有りし 櫃に鏢刺し 蔵めてし 恋の奴の つかみ懸りて (巻十六・三八一六)

右歌一首穂積親王宴飲之日酒酣之時好誦斯歌以為恒賞也

右の①から⑧の詠を点綴して次のやうな歌物語を描くことも可能である。

但馬皇女が嫁かれて香具山の麓の高市皇子の宮に居らつしやつた時、穂積皇子をお慕ひなさつてこんな歌をお作りになられた。

秋の田の稔つた稲穂がひたすら一方に傾いてゐるやうに、ただひたすらに穂積の公に寄り添ひたいわ。たとへ人の噂が繁く立つたとしても。(①)

二人の仲を懸念された持統天皇は、勅命とて、一時、穂積皇子を近江の志賀山寺(崇福寺)へお遣はしになられたので、思ひの昂じてゐらつしやつた但馬皇女は、

後に残つてちつとして恋ひ焦がれてゐないで、あなたのおあとを追つてゆきたいわ。志賀への道の曲がり角ごとに印をしておいでね。きつとよあなた。(②)

と、思ひのたけをぶつけられた。さうかうする内に、竊かに穂積皇子にお逢ひになつてゐることがばれて、人皆の知るところとなつて

人の噂がしきりでうるさい余りにこれまで渡らうとしなかつた、その早朝の川を渡るのです(皇子への恋に殉じます)。それにしても、秋の朝開の川は人の噂のやうに冷たいことですわ。(③)と詠まれたといふ。そのころ、穂積皇子が贈られた歌にこんながある。

今朝の明け方、私は鴈の鳴き声を聞いた。もう秋だ。このぶんでは春日の山も色づいてゐるであらう。この鴈のものを憂い鳴き声を聞き、黄に赤に色づく山を思ひうかべると、私の胸はあなたへの思ひでいっぱいになつてつらいことだ。(④)

恋心をもよほさせる萩の花もそろそろ咲く季になつたやうだ。庭の浅茅の穂がしきりと散つてゆくので。(⑤)

それにお応へになられた但馬皇女の歌は

あなたも今朝の鴈の鳴き声をお聞きになられましたの。私も聞きましたわ。人の噂がともひどいんですもの、こんな里に住んでゐないで、あなたと共に、その鴈に乗つてどこかへ行つてしまひたいわ。(⑥)

といふ哀切なものであつた。その後どうなつたかはわからないが、和銅元年(七〇八)といふ年の夏、皇女はおかくれになられた。

皇女の死が現実のものとなつて感じられる半年後に、み臺に向かつて穂積皇子は詠はれた。折から、雪が霏霏として降りしきつてゐた。

降る雪はたくさん降らないでくれ。皇女が眠る吉隠の猪養の岡への路の妨げとならうから。(⑦)

涙ながらの歌であつた。その後といふもの、穗積皇子は見るにあはれな様で、心は但馬皇女で占められてゐた。さうさう、こんな挿話もある。宴酣の際には、きまつて穗積に声がかかるのであつた。「おい、いつもの歌をやれ」と。皇子はおもむろに朗唱するのであつた。

我が家の櫃の奥深くへ、閉ぢ込め鍵までかけた恋といふ奴めが、いつの間にか抜け出してきて、私にとりついてくる。皇女への恋心でまことに苦しい。(註十七) (8) ⑧
そして「やんや」の喝采をうけるのであつたが、皇子の胸中たるやいかばり悲しかつたことであらうか。

二 物語を支へる世界

この物語を支へる二人の実世界があり、また支へるべく橋が数多架けられてゐる。

二人の年齢は不明である。いくつかの推測がある。拙案も含めて、表にしてみよう。全て数へ年である。

穗積皇子

生年	但馬逝去時の彼の年齢	享年	
六六六	43	50	川上 富吉氏 (注十七)
六六七	42	49	久松 潜一氏 (注三)
六六八	41	48	黒沢 幸三氏 (注五)

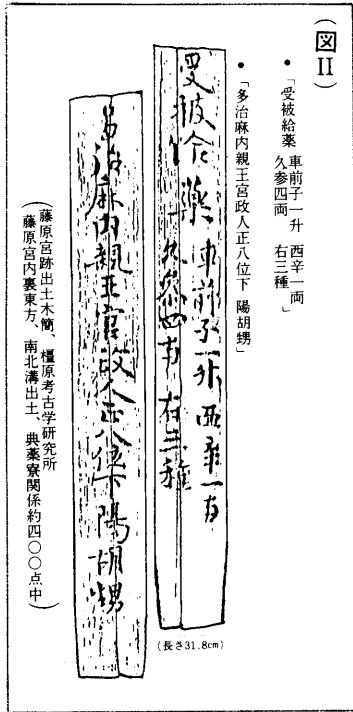
但馬皇女

六七二	37	44	大久間喜一郎氏 (注十八)
六七四	35	42	拙案
六七七	32	39	黛 弘道氏 (注七)

生年	母逝去時の彼女の年齢	享年	
六六八	15	41	川上 富吉氏 (注十七) 阪下 圭八氏 (注十九)
六七〇	13	39	黒沢 幸三氏 (注五)
六七三	10	36	井上 和人氏 (注二十)
六七五	8	34	大久間喜一郎氏 (注十八)
六七五	8	34	拙案

拙案は大久間氏の説を考慮せず別個に出したもので、後でその一致に気が驚いてゐる。穗積皇子における二歳の違ひにはこだはるものでなく、ほぼ大久間氏の考へと一致してゐると云つてよい。強ひて云へば、穗積は戦争(壬申の乱)が終つて生まれたであらうと推測したことである。但馬皇女も同じく乱後の生誕で、母氷上娘十九歳(数へ年)の時の子と推測したが、一二歳の移動はありうることである。二人の年齢推定に至つた関係者を含めての年齢年譜表を(図I)として掲げる。図Iも数へ年で示してゐる。

二人の交情の有様については深淺の想像夥しい。金子氏『評釈』は、高市皇子の薨逝にあひ、幸ひ二人は天下晴れて御夫婦となられた、十年以上も連れ添うて愛の美酒に酔ふことは十分出来たと云ひ、川崎庸之氏も十幾年の交情（注二十一）と云ふが、澤瀉氏『注釈』は、天下晴れてとか連れ添うてといふものでなく、もつとひそやかでかなしいものと推測する。賀古明氏（注七）は、但馬皇女の一方的な恋情で、穂積皇子にとつては当初親情程度のものしかなかつたとする。黛弘道氏（注七）は、太政大臣といふ高官高市皇子の思人は、当の貴人がなくなつても後家暮しを守らなければならず、穂積皇子と結ばれることはなかつたと断ずるが、「知太政官事」になり、「太政官三品」（多胡碑）と称され、一品を極めた穂積皇子に嫁いだ大伴坂上郎女が、皇子薨去後、藤原麻呂と結ばれてゐる例（万葉卷四・五二五〜五二八左注）もあり、一概には云へない。ただ、黒沢幸三氏（注五）は、藤原宮跡出土木簡（図II）（注二十二）中の「多治麻内親王宮」の語に注目し、但馬皇女は新たに内親王の宮を設営し寡婦として生活してゐたことになり、二人の結婚説は訂正されなければならぬと指摘する。これは注目によい発言である。



また、賀古明氏（注七）は、当時の皇子たちの政治情況に言及してゐる。即ち、持統四年の高市皇子が太政大臣を管掌するに至つた時から、高市皇子薨去の持統十年までの間に、『日本書紀』に記録の出でくる皇子は、草壁・高市・河嶋以外には、舍人・長・穂積・弓削の四皇子で、この内「浄広式」の冠位をもつとも早く授けられてゐるのは穂積皇子であるところから、賀古氏は高市皇子が太政大臣在任中、穂積皇子は最重要視され、高市皇子と穂積皇子との親交の中で、高市皇子宮にゐた但馬皇女は訪れ来る穂積皇子に慕情を抱くに至つたと考察する。井村哲夫氏（注二十三）や川上富吉氏（注十七）の考へもほぼこれに近い。賀古氏は、高市皇子薨後の政治情況にも言及してゐる注目できる。

このやうに、この歌物語を支へるやうな二人の実世界が存し、また物語を支へるべき情況が探られ、構築されてゐる。

三 その問題点

今ここで、作品の原点に立ち戻り、その問題点を洗ひ出し、列挙することにより、この作品群を考へてゆく視座としてみよう。

① 題詞の不連続性

三件指摘出来る。

- (一) 但馬皇女在高市皇子宮時思穂積皇子御作歌一首（①歌題詞、以下「①題」の如く略称）
- 。但馬皇女在高市皇子宮時竊接穂積皇子事既形而御作歌一首（③題）
- (二) 但馬皇女在高市皇子宮時思穂積皇子御作歌一首（①題）
- 。勅穂積皇子遣近江志賀山寺時但馬皇女御作歌一首（②題）

。但馬皇女在高市皇子宮時竊接穗積皇子事既形而御作歌一首(③題)

(三)・穗積皇子御歌二首(④⑤題)

。但馬皇女御歌一首(一書云略)(⑥題)

右の(一)と(二)は資料が相重なり、重複するやうにも一見思へるが、問題の存するところが異なるので、敢へて分けた。(一)(二)は卷二の題詞、(三)は卷八の題詞である。

(一)は、傍線部分の「但馬皇女在高市皇子宮時」の重複にある。一貫性をもたせる意図があれば、

同・石川女郎更・贈大伴田主中郎歌一首(卷二・二二八番歌題詞)

のやうに、「同」とか「更」の表現があるべきであらう。この場合なら、③題に、

但馬皇女在同・高市皇子宮時竊接穗積皇子事既形而更・御作歌一首

などと。或いは「既」があるので「更」は多少補へるとしても、最低「同」の表現は欲しいところである。

これについて澤瀉氏『注釋』は、③歌の題詞の条で、「前にあるところをくりかへしてゐるのは、資料本を異にしてをり、集の編者が纂序にあたり原本の題詞のま、によつたものであらう」と指摘する。そのとほりであらうが、資料本云々に関しては舌足らずで誤解が生じ易い。次のやうに考へるとよいだらう。

〔原初形態〕——統一された題詞状況

但馬皇女在高市皇子宮時

思穂積皇子御作歌一首

① 歌

竊接穗積皇子事既形而御作歌一首

③ 歌

〔二本への分出〕

現況①歌題詞(A写本)

現況③歌題詞(B写本)

〔万葉集卷二への定着〕——現況

右のやうな三段階を経てきたものが、今の卷二の重複した題詞状況であらう。澤瀉氏『注釋』の資料本云々は、右の第二段階のA写本B写本といふモデル情況の言及とみてよく、そのもう一段階前は、統一された資料の中に存したとみてよい。

(一)の重複について、賀古明氏(注七)は、歌③の詞書・歌が、物語的興味の上に、歌①②の一連を享けて、創作的に追補されたものゆゑのものとして推考するが、いかがなものであらうか。私は次項④の「呼称の相異」から全く異つた結論となり、従へない。

(一)に就いては、(二)と共にまとめた。

(二)は、互ひに、他の題詞を考慮に入れない、独立した題詞の書式であるといふことである。一連のものとの認識があるなら、巻は違ふが、例へば大伴家持の(亡妾悲傷歌)(卷三・四六二―四七四)(注二十四)に見られるやうに、「……又……又……更……」などといふ繋ぎの辞があつてよい。

(一)・(二)一括して云ふならば、①②③歌の題詞は各々独立してゐて、それぞれ、その歌の情況乃至背景を説明する「……時」といふ表現で示されてゐる。即ち、これら三歌は、

……時……御作歌一首

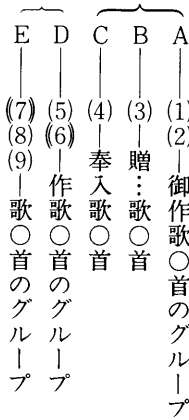
の題詞型式である。これを卷二相聞部で詳しくみると、

(1)……時……作者……御作歌二首(105 106題)

(2)……時……作者……御作歌一首(109題)

(3)……時……作者……贈……歌一首(93題)(111題)

- (4)……………時・作者・奉入歌一首(113題)
 (5)……………時・作歌一首(95題)
 (6)……………時……………作歌三首(123、125題)
 (7)……………時・歌五首(96、100題)
 (8)……………時・歌一首(101題)
 (9)……………時・歌二首并短歌(131、137題)
- などとなり、いづれも「……………時」でその歌の情況乃至背景を説明してゐる例である。これらは、



と分類出来、更に大きくABCは歌の作者の示されてゐるグループ、DEは作者名が示されてゐないグループと分けることが出来る。但し、(6)(7)については、その脚注で作者を明示してゐる。

①②③歌の題詞についてみると、「御作歌」といふことではAに近いが、この「御」字は作者層ともかかはることであり、今措くと、①③歌は作者の明示されないDの(5)型(「…時」と「作歌」の間に「…」が入るといふことでは、(6)に近い)に属し、②歌は歌の詠作者が明示されるAの(1)型に属してゐる。このことは、①②③歌の題詞が、単に各々独立してゐるといふことだけではなく、①③題の筆遣ひと、②題の筆遣ひとが相異なることを示してをり、①③の資料と②の資料が、資料本を異にしてゐる可能性を示唆するものと云へよう。これはまた、次項の「呼称の相異」と関連するところでもある。

(三)では、④⑤と⑥を贈答歌とみようと思へばさう解釈でき、その

目で見れば、④と⑥は見事に対応してゐる。にもかかはらず、巻八編者はこれを「秋雑歌」の部に分類し「秋相聞」の部に入れず、④⑤と⑥が偶然隣り合つたかの如き趣きである。隣り合つて置かれてゐるのは、資料本において並んでゐたからにはかならないと推考するが、巻八編者は④と⑥の対応、④⑤と⑥の贈答歌の側面には意を致してゐないことが確認できる。日本古典文学全集本「萬葉集」は、⑥歌の頭注で、「ここに穂積皇子の作と但馬皇女の作とを並べたのは、同時の作でなく、関連併記か後人の仮託であるかもしれない」とする。④⑤歌が、資料本以前の段階での仮託とすると、後に提出する私案に近いが、どうも頭注は⑥歌の方を関連併記か後人仮託とみた巻八への後の書込みとみてゐるやうであり、従へない。やはり、巻八編者の見た資料本に三首ならんでをり、しかもそのならばは歌物語を背景にしたものであらうが、編者は三首の関連に意を致さず、資料本のならびのままに雑歌部へ編んだのであらう。

以上、(一)・(二)及び(三)から、巻二編者も巻八編者も歌物語が念頭にはなかつたと考へてよからう。ただ(二)において、歌順を①③②とはせず(注二十五)、なぜ①②③と配したかといふことを考へる時、巻二編者は③題の「…事既形而」に時間的経過を見てとり、①②の後に③を配したのではあるまいかといふことが推測される。そこにや①②と③の関連に気付いてゐる節があるが、それを大きく出するものではなく、まとめとしては、歌物語までは念頭になかつたと結論付けてよからう。

◎呼称の相異

一連の歌の中には、

君(①)吾勢(②)人(③)己(③)吾(④⑤)奴(⑧)

の呼称が使はれてゐる。自称・第三称は今措き、対称に注目する時、

①歌の「君」②歌の「背」が祖上に挙がるが、この相異は注目してよい。「君」は一般に敬つて呼ぶ表現であり、「背」は一般に親しみをこめて呼ぶ表現である。勿論「君」にも、敬意が薄く「あなた」に近い意の場合も存するが、『岩波古語辞典』のやうに、

《二人称の代名詞的に用いて》あなた

《敬意をこめた三人称の代名詞的に用いて》あのおかた

と截然と分けられるものではない（『時代別国語大辞典・上代編』『万葉の歌ことば辞典』『歌枕歌ことば辞典』参照）。一般的には、濃淡の差こそあれ、「君」には心理的距離感・敬意が存するものと見るべきで、「背」には対等に近い親しみを見てとるべきであらう。②歌の場合、「我が背」と「背」の上に親しみをこめた「我が」の表現があり、「君」表現との間隙が大きい。

この事実から、①②歌は作歌時期を異にとみるのも一案であらうが、私は①②歌の作者が異なる、即ち②歌は但馬皇女の真作ではないとみたい。

高野正美氏は集中の但馬皇女歌四首（①②③⑥）を類歌類句の面から考究してゐて（注二十六）注目できる。氏は①歌について、序詞部分は類型の域を脱せず、生活に密着した修辞を用ゐてゐるが、本旨においては熱烈な思慕の情を個人的な修辞を用ゐて表はしてゐるとする。畠山篤氏（注十一）が同じく類型発想からアプローチしながら、先考の高野考説に触れず、「一般的な調子の歌」と結論付けるのとは違い、高野氏の考が一段と精しいと云へよう。②歌は後にまはし、③歌についても高野氏は、類歌が指摘できながらも、単に類型に墮することなく、個人的な面の萌芽が見られるとする。これは畠山氏もほぼ同様で、独創的表現とする。⑥歌についても同様で、高野氏は、形式を同じくする類型の中にあつて、着想・発想を異にした個人的な面があり、類

型的要素と個人的・創造的要素との混沌としたものと結論付ける。畠山氏には考究がなく、「伝承歌であろうが、極めて特色のない意欲に欠けた歌」とのみ云ふが、やはり高野氏の方が精しく正鵠を射てゐる。

かういふ中で、祖上の②歌について、畠山氏は、類型発想はしてゐるが、類型を打破してゐる独創性の窺はれる歌と結論づける。第五句の「標結へ。吾がせ」の句中切・体言止めがそれと知れる。この点高野氏も、多くの類型表現を指摘しながら、「標語へ吾背」と結んだ皇女の歌は特殊なものと言及する（但し、「……恋ひつつ有らずは」の結びは第五句でなく、第三句の「追ひ及かむ」であり、その点は一般的類型表現の一つであることを確認しておきたい）。さう言及しながらも、高野氏は、結句の句中切・呼びかけの形式・呼びかけの対象・命令形での呼びかけ・体言止めについて、集中の用例を精査し、これが相聞歌にあつては一般的であり、「標結へ吾背」は類句こそ持たぬが類型的発想の句であることが分かる指摘するのは留意すべきことである。①③⑥歌が類型表現の中に身をおきながらも、個人的独創的表現がうかがへるに對し、②歌は類型発想の中にあると云へる。

さきの、「君」と「吾が背」の呼称の相違を勘案すると、この②歌は但馬皇女の真作ではなく、第三者の但馬皇女への仮託であるといふ私家が自づと出てくるのである。

⑧巻の相異

これは大きな問題点とはならないが、一往の事実確認をしておく必要がある。①⑧詠は同一の巻に纏つてゐるのではなく、分かれて編まれてゐる。

- (A) 卷二 ①②③（相聞の部）
 (B) 卷二 ⑦（挽歌の部）
 (C) 卷八 ④⑤⑥（秋雑歌の部）

(D) 卷十六 ⑧ (有由縁雑歌の部)

右の(A)(B)は部立といふ便宜によつたもので、よいとして、(C)(D)はその歌意解釈から(A)の相聞の部に組み入れることも可能である。私見では(D)の⑧は一連の物語から切り離してみた方がいいのではないかと思つてゐる(後述)のでこれは除外しても、少くとも①―⑦の一連に卷八編者・万葉集編者が意を致し、④⑤⑥歌を卷二相聞へ切継ぐといふことは可能であつたといふことである。例へば後藤利雄氏が卷九(雑歌)より卷二(挽歌)への切出し切継ぎを指摘してゐるのはその好例である(注二十七)。さうしてゐないといふことが積極的意味を持つものではないが、卷二と卷八に分かれてゐるといふ不連続性に注意しておきたい。

③ 高市皇子宮と内親王宮と

藤原宮跡出土木簡(前出図Ⅱ)中の「多治麻内親王宮」の語に注意を払つたのは、黒沢幸三氏(注五)であつた。氏は、夫高市皇子の死後、高市との間に子のなかつた皇女はあらたに内親王の宮を設営し、寡婦として生活したと推考する。

一方、高市皇子宮に身を寄せるやうになつたのは何時からかといふことも考へなければならぬ。犬養孝氏(注五)は卷二の歌の配列から、高市皇子が太政大臣になつての後とするが、歌の編纂の問題ともかかはり、興味ある一案としておきたい。一般には、賀古明氏(注七)井村哲夫氏(注二十三)川上富吉氏(注十七)など、それぞれにその解釈に微妙な異ひはあるが、但馬皇女の母氷上娘の死後とする。前記黒沢氏も同様である。

さうして皇女は高市皇子の妻となつたとみるのが通解(前引注五)であるが、大久間喜一郎氏(注十八)は、穂積皇子との不義密通を意味すると考へるのは馬鹿馬鹿しいとし、「どうも皇女が高市皇子の宮

に在つたのは、幼くて母に死別した皇女を、何らかの事情によつて高市が預つていたのではないか」と考察する。この新見は留意してよい。右の諸説を勘案しつつ考へるに、但馬皇女は八歳にして母の死に遭ひ(前出、私案)、長兄の高市皇子の宮に一時ひきとられ育てられた。皇女が成人(十三歳)するや、いつの日か、恐らく成人後さう遠くない日に、自身の「内親王宮」へと独立した。而してその「内親王宮」とは、亡母氷上娘の里宮(即ち、亡き鎌足の邸の一つ)ではなかつたか。これが「歌物語」とは離れた、彼女の身辺の事実ではなかつたかと推考するのである。で、①③歌の題詞「在高市皇子宮時」をふりかへるに、①③詠は彼女の十三四歳以前のものとは到底考へられない。事実に即してみるならば、「在但馬内親王宮時」として①③詠はあるのであらう。

ただ、①③歌の題詞の「在高市皇子宮時」は、皇女が一時高市皇子宮に身を寄せてゐたといふ伝承があつたことを示すものとみてよく、その伝承は右にみたやうな事実より出たものとみられるのではなからうか。

④ 景物としての春日山

④歌の穂積皇子詠に就いては、次のやうな指摘がある。

「春日山」の出でくるところを見れば、和銅三(七一〇)年平城遷都後、和銅八年、穂積皇子が世を去るまでの五年間のいづれかの時の歌であるかも知れない。とすれば、但馬皇女の没後のこととなる。(犬養孝氏、注五)

黒沢幸三氏(注五)森城氏(注十二)もこれに従つてゐる。その中で黒沢氏は、穂積皇子の養育者穂積氏の拠点「細見の里」(奈良市東九条町)を指摘するが、この氏の説が正しいなら、平城遷都後にこだはる必要はないことにもなる。しかし、一般的な蓋然性からみると、万

葉集中の「春日」を詠む歌は、平城遷都後の万葉第三期四期詠である。幼時の穂積皇子と春日の地とかかはりがあつたとする黒沢氏の説を認めたとしても、景物として歌に「春日」が詠まれる可能性は、やはり平城遷都後が高いと云へよう。

⑥ 題詞中の物語的要素

③ 題詞中の「竊」の用字について、中西進氏は『文選』に夥しい文字であり、万葉集では恋の事件にからまる、悲しい結末を予想しての用字と云ひ（注二十八）、川口常孝氏は密通にかかはる用字と指摘する（注九）。賀古明氏（注七）は、作り物語性が存すると云ふ。

また同じ③ 題詞中の「形」の用字につき、賀古明氏（注七）は、紀歌謡九六に關しての「忽形於言」を引き、「物語的な性格の所在を認めることは既に不当とではない」とする。いづれも留意してよい物語的要素といへる。

四 歌物語として

当面歌を歌物語的側面からとりあげた初めは窪田空穂氏・久松潜一氏であらう（注三）。

窪田氏『評釈』（昭和二十四年二月）では、

結果から見ると、おのづからにして歌物語の趣きを持つものとなつて来て、意図をもつての連作と同様なものとなつてゐる。これは本集に少くない連作・歌物語の発生と密接な関係をもつこととして注意される。（卷二・一六番歌の項）

と云ひ、久松氏は記紀歌謡との比照から、当面歌を「歴史的事件を背景としてよまれた抒事詩」と規定した。これを承けて、犬養孝氏は、後の歌物語につながるもの（注二十九）とし、伊藤博氏の「宮廷ロマ

ンス」（注三十）の論を経て、歴史的事件を背景とした歌物語といふ見方でほぼ定着してゐるといつてよい。「歴史的事件」の語はいささか大げさであるが、高市・但馬・穂積の三角関係及びそれによつてはる一連の動きが存したといふものである。井村哲夫氏（注二十三）は「一つの歌物語が形成されてゆくふし」と云ひ、阪下圭八氏（注十九）は①②③ 歌に「題詞を付し、序破急の展開にも似た物語化を行なつた人々がいたことになる」とし、犬養孝氏（注五）は③⑦ 歌の題詞に「物語として伝えようとする者の意図を看取ることができると云ふが、全て歴史的事件を背景としてゐるとみてゐる。これは、賀古明氏（注七）・阪下圭八氏（注三十一）・川上富吉氏（注十七）・畠山篤氏（注十一）・森城氏（注十二）なども同じである。高野正美氏（注二十六）の論は、その歌物語性を強く説くものとして注目できるが、その根底に「歴史的事件」を据ゑてゐるのか否かについては明言してゐない。

一方、神永あい子氏は、但馬皇女歌①②③⑥ 歌をとりあげ、それぞれ類歌との比較から歌の独自性を説き、また卷二・卷八編纂レベルでの非物語性を確認し、物語を創作・構成しようとする第三者の介入の可能性を否定し、但馬皇女その人の事跡にもとづく事実詠・事実譚であるとの見方をとつてゐる（注三十二）。ただ考察が多面的でない憾みがある。黒沢幸三氏の論（注五）も、歌の世界と事実界との間隙を埋めようとした労作である。

かうした中であつて、私は、先の「その問題点」で考察したことを足がかりにして、以下のやうな文学世界を描いてみようと思ふのである。

五 「言寄せ」の褻の世界

さきほどの考察から、②歌は但馬皇女の真作とは思へず、第三者の但馬皇女への仮託といふ結論が導き出された。但馬皇女詠は①③⑥の三首といふことになる。その①③の題詞も疑はしかった。「在高市皇子宮時」は「在但馬皇女宮時」であらうし、③の題詞中の「竊」「形」も物語的色彩が濃いといふ指摘があつた。①③歌は、共に①③の題詞から解放して、裸の姿で見なほして見る必要があらう。①③歌をその題詞から解放すると、穂積皇子にあてた詠か否かも明らかでなくなつてくる。それが真相に近いものであらう。即ち①③⑥歌は、うら若い但馬皇女が、但馬内親王宮にあつて、恋歌の習作として、弾む心を内に秘めながら綴つた仮想のモノローグ（注三十三）であらう。類想表現があるのもそのゆゑであらう。「事痛」（①）「人事」（③）「事繁」（⑥）と「人言」の詠が並ぶのは、当時の恋歌の一般としての類想表現にも由来するが、また皇女の関心事が其処に存したからでもあらう。

①③⑥歌は高市皇子とも穂積皇子ともかかはらない但馬皇女の独詠で、歌物語とも無縁であつた。これが原形であらう。

ついで①③歌が何らかの事情で作者の手を離れた。この間に「但馬皇女在高市皇子宮時」などといふ題詞が付けられた可能性がある。その後①③歌は一旦分離したと思はれる。

この③の原歌は純粹にしてひたすらな仮想の恋歌であらうが、「在高市皇子宮時」の題詞と「人言」・「未渡らぬ朝川渡る」の表現とが相俟つて、三角関係にまで繋がれてゐたのではあるまいか。そこへ、作者不明の歌屑の中から、或いは多少の修正を施されて、②歌が加へられたのであらう。

なぜ穂積皇子が「言寄せ」られたかは不明といふほかはないが、多少の色付けは出来る。

（図Ⅲ）は、天智・天武の皇子女系図であるが、多少工夫をしてゐ

る。即ち、天智天皇と天武天皇の間に挿まれた真中の皇子女は、父母ともに皇族といふ、皇室中心の当時にあつて、恵まれた血筋の人々と云へる。対する天武天皇の左側に示した皇子女は、母が民間の出で、夫人や宮人である。いはば宮廷皇子女界にあつてはアウトサイダー的存在、少くとも天皇の位は望むべくもない一ランク下の皇子女といへる。但馬皇女も穂積皇子もこの方に属してゐる。但馬皇女に穂積皇子が「言寄せ」られた一事情はこの辺にもあるであらう。

また、②歌の「遺れ居て恋ひつつ有らずは追ひ及かむ」の表現と、穂積皇子の崇福寺派遣といふ事実との結び付きも否めまい。（注七）の中でも、「物語を支へる世界」の中でも私見は示さなかつたが、穂積皇子の崇福寺派遣は、藤原遷都（持統八年十二月六日）後、程遠からぬ頃、遷都の報告として持統天皇の勅により遣はされたものではなかつたか。崇福寺は天智天皇即位時に建てられた寺（注八）で、天智の菩提寺であつた。娘持統天皇が亡父天智に遷都の報告をするのは然るべきことである。

加ふるに、「物語を支へる世界」でみた、二人を結び付けるべき実世界の様があつた。

以上のやうな情況から、但馬皇女に穂積皇子が「言寄せ」られるに至つたのではないか。

その後、②と③の繋がりへ①も再び帰属して巻二に加へられたのであらう。このころ⑦も物語像の展開と共に増補され、巻二へ編まれたと思はれる。⑦歌はもと、但馬皇女への挽歌でも、穂積皇子の作でもないものであつたかもしれない。

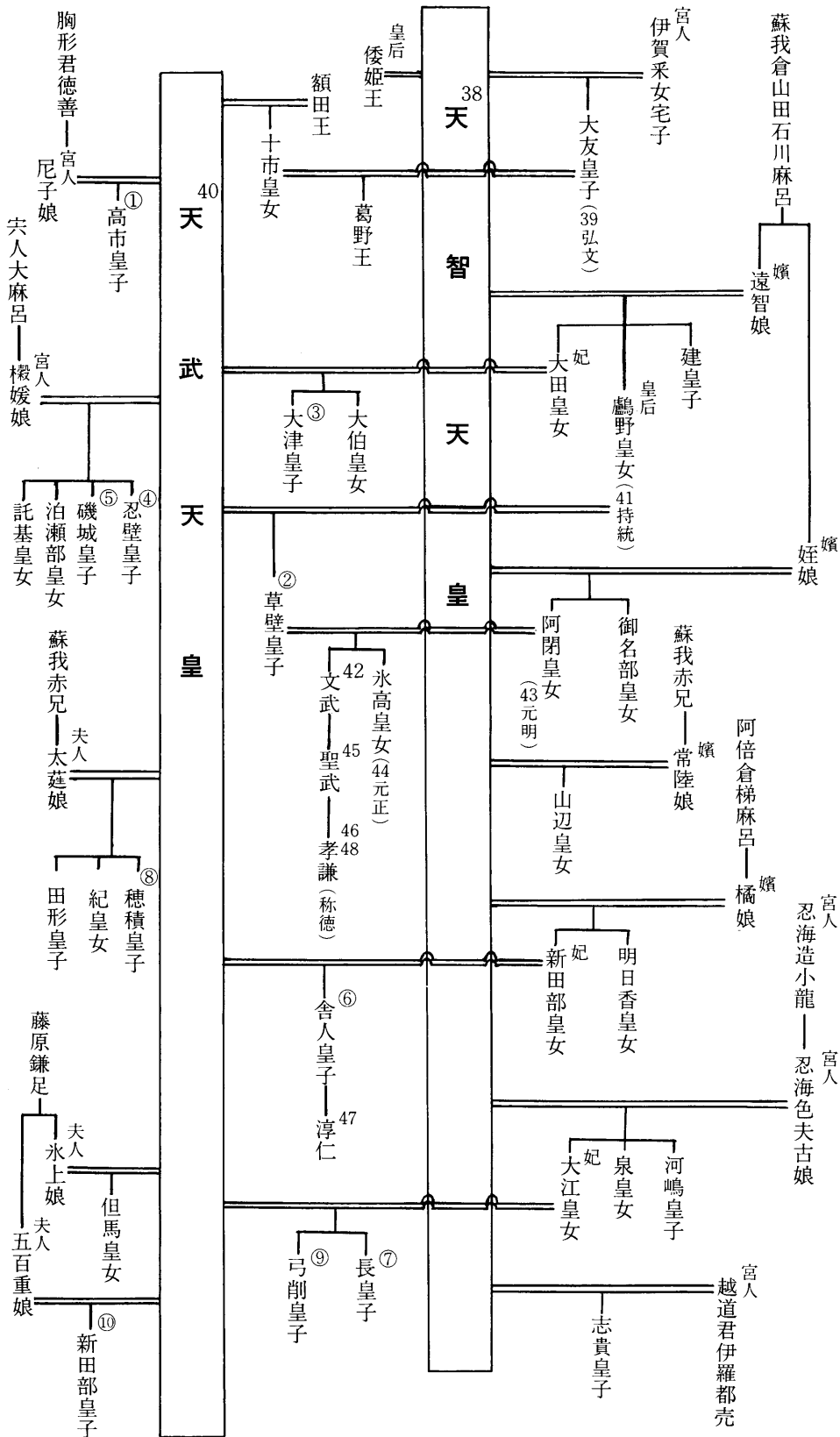
ここで、巻二の成立と①②③⑦歌について触れておかなければなら

ない。伊藤博氏は巻二の原形を、八五〇二二七番歌まで、ただし、或本と

(圖III)

天智・天武の皇子女系図

(。横に並ぶ兄弟姉妹の長幼順は便宜上無視してゐる。
①⑩は天武十皇子の推定誕生順で青木和夫氏による。)



増補分の一三〇・一四六・一六二を除く、とした。そしてこの編纂を元明天皇の在位末年から上皇時代と推定し、『元明万葉』と名付けた(注三十四)。この『元明万葉』は卷二の少数の歌を除いた大半であるが、その後、久米常民氏は卷二の原形をもつと限定した。即ち、卷一同様に持統朝の終りまでの皇室関係作品と規定し、『古万葉集』と名付けた(注三十五)。左の如くなる。

相聞 八五〜一二二

但、九六〜一〇〇、一〇一・一〇二の後補分は除去

挽歌 一四一〜二〇二

但、一九六〜一九八の後補分は除去

今これを組上歌とのかかはりて示すと次のやうになる。

… …

從吉野折取蘿生松柯遣時額田王奉入歌一首(一一三)

① 歌(一一四)

② 歌(一一五)

③ 歌(一一六)

舍人皇子御歌一首(一一七)

舍人娘子奉和歌一首(一一八)

弓削皇子思紀皇女御歌四首(一一九〜一二二)

以上、久米氏『古万葉集』卷二相聞の部終了。

… …

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌(一九九

(二〇一)

或書反歌一首(二〇二)

以上、久米氏『古万葉集』卷二挽歌の部終了。

⑦ 歌(二〇三)

弓削皇子薨時……………(二〇四・二〇五、二〇六)

久米氏の『古万葉集』は持統天皇讓位の持統十一年(六九七)で切つてゐる。挽歌の部の方から先に見ると、

高市皇子、持統十年(六九六)七月薨。

但馬皇女、和銅元年(七〇八)十二月薨。

弓削皇子、文武三年(六九九)七月薨。

となり、高市挽歌で切り、但馬挽歌・弓削挽歌が除外されてゐるのは故あることである。相聞の部は、久米氏もどこで切るべきか思案した。持統十一年の時点で舍人皇子は二十二歳であり、『古万葉』へ入る可能性はあるといふ拙案(私信)を納れ、弓削皇子も薨去は『古万葉』を閉じた二年後であり、次の一二三番歌からは私的内容といふことで、さきの如く提示したのであつた。判然とはしない、判然と出来ない線引きであつた。私の名まで引いて頂いての久米氏の説であるが、①の前の、持統朝における額田王歌(一一三番歌)で『古万葉集』は終へるべきではないか、①②③歌や舍人皇子・弓削皇子詠は後補とみるべきではないか、と今はなき久米氏に報告したい昨今である。

とすると、相聞の部も挽歌の部も、①②③・⑦の前で『古万葉』は終つてゐる。その『古万葉』に①②③・⑦の物語化した歌が第一次増補され、ついで弓削皇子関係歌が相聞の部と挽歌の部へ第二次増補された。この折に舍人皇子贈答歌も相聞の部へ編まれたであらう。かう考へると、挽歌の部において但馬皇女と弓削皇子が薨年順になつてゐ

ないことが難なく説明できるのである。

かうして物語的展開を経た①②③及び⑦歌は、『古万葉集』卷二の相聞・挽歌部末尾へ増補された。

一方、卷二への定着とは別に口承の世界において、①②③歌が物語の核として回りはじめたのではないか。但馬皇女の歌といふことで⑥も①②③と共に唱はれた。その伝承の姿の証として「一書云」「一云」が指摘できる（注三十六）。即ち、「児部女王」（卷十六・三八二—一書の子部王）が第二句を「国に有らずは」の形で誦し伝へたものと推測できる。その⑥に穂積皇子の④⑤も仲間入りしたのであらう。もともと④⑤は、平城遷都以後（但馬皇女没後）における詠作の可能性が高いと先に考へたが、やはり遷都後の、しかも穂積皇子の単なる季節詠（注三十七）であつたのであらう。物語的展開の上において、④の上句或いは⑥の下句の一部、殊に鷹鳴の部分が手なほしされてゐるかもしれない。

⑧歌は土屋氏『私注』が流行の民謡を皇子が謡つたものと云ひ、黒沢幸三氏（注五）金子武雄氏（注三十六）が誦詠歌であつて創作歌ではないとするやうに、一連の詠とは恐らく無関係のものであらう。澤瀉『注釈』は、穂積皇子の孫である広河女王の卷四・六九五番歌において、祖父の⑧歌を学んだ事は明らかであるとし、黛弘道氏（注七）は穂積皇子の子の境部王の作（卷十六・三八三三）をもとりあげ、犬養孝氏（注五）も恋の奴の系譜を語るが、これは、穂積皇子の愛詠歌を学んだといふ程度のものではないだらうか。

しかしこの⑧歌も歌物語展開の上で、一連の歌と関係づけられて唱はれなかつたとも云ひきれない。

万葉歌の流伝の様は仮名万葉において見ることが出来、その詳細は渋谷虎雄氏の『古文献所収萬葉和歌索引』をはじめとする一連の研究

で具にわかるが、なかでも①②③⑤⑥⑧は『古今和歌六帖』に（①③⑤は「わづみの王子」、②は「みしまの女王」、⑥⑧は作者未詳として、⑧は初句が「わがやどの」の形で）、⑥はまた『柿本集』（上）に収められてゐるのが特に注意をひく。高野正美氏（注二十六）は①②③歌の『古今六帖』所収歌とその作者に言及し、歌物語流伝の痕跡と云ふ。その指摘の通りであらう。

また川上富吉氏（注十七）は『歌経標式』所収の次の歌に注目し、

但馬内親王答穂積親王歌曰
伊麻佐羅尔 那尔可於母波牟 字知那婢俱 己々侶婆岐美尔 与利尔旨母能呼（一六）

この題詞により穂積皇子が但馬皇女に少くとも一回一首は恋歌を贈つたことがあるとし、川上氏・黒沢幸三氏（注五）共に右の歌を但馬皇女の歌とするが、黒沢氏自身が言及するやうに、

今更に何をか念はむ打靡き情は君に縁りにし物を（万葉卷四・五〇五、安倍女郎）

の歌とほぼ一致し、また上句は卷十二・二九八九番歌、下句は卷十二・二九八五番一云、卷十・二二四二番歌など十首近い類似の歌がある。『歌経標式』の一首は単純に但馬皇女の歌とは云へない。森斌氏（注十二）の指摘するやうに、やはり歌物語としての流伝の一つの姿とみた方がよからう。

以上、但馬皇女の独詠歌それも高市皇子や穂積皇子と無関係の習作的モノローグを核として、増補展開し歌物語化していく相を一瞥することができた。これは一つのモデルを想定したまでであつて、右のやうな展開のプロセスの一端に必ずしもこだはるものではない。冒頭に示した歌の私解（訳）も、歌物語の世界においての解にほかならず、その実意は別にあること論述の中で触れてきたとおりである。

さて、万葉恋歌の中に「人目」「人言」は格別多い。その「人言」とは漠然とした噂もあらうが、具体的な人名を伴つたものもあつたであらう。その中には、

さ松のくま松隈川の瀬を早み君が手取らば言縁せむかも（七・一一）

〇九）

のやうに、火の気のある所から立つといふ煙もある。しかしまた、

争へば神も悪ます縦多やしよそふる君が悪く有らなくに（十一・二六五九）

二六五九）

霰零り遠つ大浦に縁する浪縦も依すとも憎く有らなくに（十一・二七二九）

二七二九）

のやうに根も葉もない噂も立つたであらう。即ち但馬皇女をめぐる歌物語はこの「言寄せ」の世界に成り立つたものであり、但馬皇女が存命中にこの「言寄せ」を聞いてゐたなら、「縦多やしよそふる君が憎くからなくに」程度の思ひを抱いたかも知れない。或いは穂積皇子が存命中にこの「言寄せ」を聞いてゐたなら、

しなが鳥居名山響に行く水の名のみ縁そりしこもり妻はも（十一・二七〇八）

二七〇八）

といふ嘆きをしたかも知れない。右の歌には、「一云、名のみ縁そりて恋ひつつや在らむ」の異伝がある。本歌が男歌であるのに対し、異伝歌は女歌とされる。男用・女用として広く唱はれた形跡がここにある。

以下この「言寄せ」の歌を若干見てみたい。

牛窓の浪の塩さる鳴響み依そりし君に相はずかも有らむ（十一・七三二）

七三二）

浪の間ゆ雲に見ゆる粟鳴の相はぬものゆ多吾に依そる児等（十二・三一六七）

三一六七）

里人の言縁せ妻を荒垣の外にや吾見む悪く有らなくに（十一・二二）

五六二）

山菅の実成らぬ事を吾に依そり言はれし君は孰とか宿らむ（四・五六四、大伴坂上郎女）

これらは、逢ひもしない名だけの「言寄せ」を詠んでゐる。

かつしかのままの手児奈をまことかもわれによすとふままでのこなを（十四・三三八四）

「言寄せ」に驚喜してゐる歌である。真間の手児奈は山部赤人や高橋虫麻呂などに詠はれた伝説上の美人であるが、新潮日本古典集成本『萬葉集』は頭注で「ここは、現実の、ある美女が裏打ちされているのであろう」と云ふ。〇〇小町といつたところか。今も子供の世界で△△くん××ちゃんといつた根もない「言寄せ」があり、週刊誌は芸能界の「言寄せ」に余念がないが、これは一種の遊びの世界である。

大船の艫にも舳にも依する浪依すとも吾は君がまにまに（十一・七四〇）

七四〇）

浅茅原苜蓿刺して空ことも縁そりし君が辞をし待たむ（十一・七五五）

七五五）

……汝をぞも吾に依すと云ふ吾をぞも汝に依すと云ふ汝は如何に念ふ……（十三・三三〇九）

三三〇九）

これらは、「言寄せ」を契機に相手の気を引かうとするとか、相手に働きかけをするといった表現になつてゐて面白い。

……汝をぞも吾に依すと云ふ吾をもぞ汝に依すと云ふ荒山も人し依すればよそるとぞ云ふ汝が心ゆめ（十三・三三〇五）

三三〇五）

これは、他人の「言寄せ」が契機となつて二人の仲も自づと成就すると云ふのである。

以上、「言寄せ」の歌々は「人言」詠と共通の褻の世界を描いてをり、これは人々が広く共有する相聞心情の世界でもあつた。晴の世界なら

ぬこの藝の世界で、歌物語は育まれ文芸化されていった。現実の但馬皇女や穂積皇子の生の営みは別にあり、それとは離れたところで歌は物語られていった。但馬皇女に言寄せ、また穂積皇子に言寄せた。

但馬皇女と穂積皇子の一連の歌は、この藝の「言寄せ」の園に咲いた悲しくも美しい花であった。

(注)

一 松田好夫氏「潜在問答歌」(『美夫君志』第四号、昭和三十六年十月、同氏「万葉研究新見と実証」所収)。

二 例へば、北山茂夫氏は、巻一・二九―三三、巻二・一一五、巻三・二六三、二六四、二六六、二八七、三〇五の各歌を繋ぎ、「女帝と詩人」同氏「萬葉の創造的精神」昭和三十五年四月)、松田好夫氏は巻一・一五番歌と八番歌を論じてゐる(「斉明女帝の西征と万葉作品」『美夫君志』第十二号、昭和四十三年七月、同氏「万葉研究作者と作品」所収)。

三 窪田氏「評釈」や、久松潜一氏「記紀歌謡と初期萬葉」(『萬葉』第六号、昭和二十八年一月)など。

四 訓に問題があり、説が分かれるところである。いま、大野晋氏説(「萬葉集訓詁断片」『萬葉』第三号、昭和二十七年四月)により、片(かた)の音交替形「こことこ」とみて、「片_カよりに」としておく。

五 「但馬皇女在高市皇子宮」は、「妃としましてまします」(山田氏「講義」などと解するのが一般で、犬養孝氏は「妃の一人として同棲」(「但馬皇女の歌」『万葉集を学ぶ』第二集、昭和五十二年十二月)と言ひ、黒沢幸三氏も「妻として同居」(「穂積皇子と但馬皇女」『文学』第四十六卷第九号、昭和五十三年九月)と言ふ。

六 高市挽歌(巻二・一九九)中の「香米山之宮」でそれとわかる。

七 「考」や「略解」は事の露見で法師にされ山寺へ下つたと見、金子氏「評釈」は一時の勅勤による寺籠りとし、黛弘道氏(「穂積親王」『歴史公論』第三卷第三号、昭和五十二年三月、歴史公論ブックス「万葉の時代」所収)は①の歌が直接の原因になつたと言ふ。

梅原猛氏は、持統は高市の権力をおもんみて蟄居させたと解釈する(「但馬皇女の恋歌」『古典の中の女流歌人』上巻、昭和五十二年九月)。真偽はさておき、右の諸解の方が、歌物語の中での享受としては、面白いものであると言へる。「攷證」は、造立の事かさるべき法会などでの勅使と言ひ、土屋文明氏担当の「総釈」も単なる使とする。

北山茂夫氏(注二)は持統志賀行幸にかかはりをもつ参向とし、黒沢幸三氏(注五)は北山説に続けて、これは拔擢で政界への初登場だつたとまで言ふ。賀古明氏は河鳴皇子の冥福を祈るための派遣(「但馬皇女と穂積皇子との恋」『国文学』第十一卷第十三号、昭和四十一年十一月)とし、渡瀬昌忠氏は持統四年四月十三日の仏事と関はり、近江朝の鎮魂のため(「人麻呂の宮廷詩の場」『国文学』第二十一卷第五号、昭和五十一年四月)と言ふ。これは公務の旅とみるもので、私見(後出)もこの中に属する。

八 志賀山寺を崇福寺とみたのは北村季吟の「捨穂抄」で、以後通解となつてゐる。「扶桑略記」に拠ると、天智が即位したその十四日後に「於近江国志賀郡、建崇福寺」とある。続いて「扶桑略記」に収められてゐる「崇福寺縁起」の堂塔の記事と、崇福寺跡とされる寺院址の発掘結果はほぼ照応するものである。

九 集中の用例から「竊」は密通にかかはる用字であると川口常孝氏は指摘する(「あかときつゆ」同氏「萬葉作家の世界」所収)。

十 賀古明氏(注七)は「事既形而」の「形」の用字に、物語的性格の所在を認めてゐる。

十一 初二句「人事乎 繁美許知痛美」は、一般に第五句「朝川渡」

にかけて解してゐるが、稲岡耕二氏（「但馬皇女の歌」『明日香』第四十二巻第一・二合併号、昭和五十二年二月）・畠山篤氏（「但馬皇女の恋歌」『国学院雑誌』第七十九巻第二号、昭和五十三年三月）が第四句「未渡」にかかると指摘する、その解釈がよい。

十二 「朝川渡」は難解で、諸説がある。「川を渡る」とは、巻四・六四三番歌や七夕歌などから、大久間喜一郎氏が説く（「川を渡る女」『国学院雑誌』第六十八巻第九号、昭和四十二年七月同氏「古代文学の構想」所収）やうに、男女間における一線を越えることを意味する譬喩表現であらう。似たものに、森斌氏の「恋の成就を願う寓意と実際に川を渡る行動とが含まれて表現された句」（「但馬皇女歌の特質」『国語国文学誌広島女学院大学』第九号、昭和五十四年十二月）とするものがあるが、あくまでも譬喩表現であらう。「朝」に関しては稲岡氏（注十一）の所説もあるが、かつは朝帰りがかつは早朝の水の冷たさが念頭にあつて表現されたのであらう。譬喩表現の一環である。

譬喩説には、『代匠記』・『考』・『略解』また中西進氏（「水辺の婚」『万葉集の比較文学的研究』昭和三十八年一月）の解、『古義』・『折口口訳初版』・藤田勝氏「朝川渡る」の解釈について（『美夫君志』第二十一号、昭和五十二年二月）の解、及び『拾穂抄』・『完訳日本』の古典・万葉集」などがあり、それぞれ説くところが異なる。

一方体験説には、『松婦手』・井上氏「新考」『講義』・『注釈』・木村氏「美夫君志」松田氏「新釈」・茂吉「秀歌」『大系』・『折口口訳改稿』・総釈土屋文・畠山篤氏（注十一）黒沢幸三氏（注五）などがあり、説くところが異なる。黒沢氏は穂積皇子の宮を母大薙娘（石川夫人）が住んだ石川（橿原市石川町）から剣の池（石川の池辺りの地にあつたと見、大養孝氏（注五）はその川に八釣川を想定してゐる。

十三 萩は集中一三七首の多きを数へるが、その中の、巻八・一五七

九、巻十・二二二、二二四、二二八番歌などから、女性の姿態を思はせる恋の花（恋心を抱かせる花）といふ想ひがあつたやうである。

十四 『代匠記（精撰本）』は、「どこかへ」でなく、穂積皇子の御許へと解してゐる。

十五 賀古明氏（注七）は、⑥歌が、穂積皇子の④⑤歌を詠出する心情を誘ひ起こしたとする。

十六 「六月丙戌（廿五）、三品但馬内親王薨。天武天皇之皇女也。」（『統紀』和銅元年条）。

十七 ⑧歌について、久米常民氏は「皇子の宴席でのおは、この歌」と言ひ、「但馬皇女との恋愛の戯画化」と言ふ（「但馬皇女と穂積皇子」同氏『万葉集・時代と作品』昭和四十八年二月）。川上富吉氏も「ますらをの悲しき玩具」と評する（「但馬皇女と穂積皇子」『萬葉集講座（五）』昭和四十八年二月、同氏「万葉歌人の研究」所収）。

十八 大久間喜一郎氏担当『万葉集歌人事典』の「但馬皇女」の項。昭和五十七年三月。雄山閣。

十九 阪下圭八氏「未だ渡らぬ朝川渡る」（『万葉集物語』有斐閣昭和五十二年六月、同氏「初期万葉」所収）。

二十 井上和人氏「出土遺物と藤原宮」（飛鳥資料館図録第十三冊「藤原宮」昭和五十九年十月）。

二十一 川崎庸之氏「天武天皇の諸皇子・諸皇女」（『萬葉集大成』第九巻、作家研究篇上、昭和二十八年六月）。

二十二（図II）は、『飛鳥・藤原京展』（橿原考古博物館パンフ、昭和四十五年秋）による。奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第二十五冊「藤原宮」では、大宝三年（七〇三）頃の木簡と推定してゐる。

岸俊男氏は、「天武天皇の皇女但馬内親王家から、車前子・西辛（細辛）・久參（苦參）の三種の薬物を典薬寮に請求したときに用いた木簡である。政人は家令職員令にみえる家従にあたる。…中

まうりこじと

- 略：官位令によると、三品親王家の家従は正八位下相等であり、まさに適合する」（藤原宮跡出土の木簡『月刊文化財』六十八号、昭和四十三年六月。同氏『宮都と木簡』所収）と解説する。『藤原宮木簡』（奈良国立文化財研究所編）の一・二集にはなぜか収録されていない。なほ、『木簡』（狩野久編『日本の美術』一六〇号）及び『藤原宮』（注二十一）参照。
- 二十三 井村哲夫氏『悲恋の物語』（『国文学』第十三巻第十四号、昭和四十三年十一月）。
- 二十四 この一連十三首の題詞構成については、小野寛氏の指摘があり、従ふべきである（『大伴家持亡妾悲傷歌』『万葉集を学ぶ』第三集、昭和五十三年三月、同氏『大伴家持研究』所収）。
- 二十五 『万葉集女性の歌』（昭和十五年六月）中の「但馬皇女」の項（清原道子氏担当）では、二人がひそかに接つた結果、志賀山寺に遣されたと見て、②と③の歌順が逆でないかと推測するが、いかが。
- 二十六 高野正美氏『但馬皇女論』（『上代文学』第十五号、昭和三十年十一月）。
- 二十七 後藤利雄氏『人麿の歌集とその成立』（万葉集各巻所在の人の麻呂集の歌）昭和三十六年十月。
- 二十八 中西進氏『感愛の誕生』（『国語国文』第三十五巻第四号、昭和四十一年四月）。
- 二十九 犬養孝氏担当『第二期の歌風と作家（但馬皇女と穂積皇子）』（『日本文学史・上代』昭和三十年九月、昭和五十年十一月の増補新版も同文）。
- 三十 伊藤博氏『宮廷ロマンス第三章「恋物語の傾向」の内』（同氏『万葉集相聞の世界』、昭和三十四年十一月）。
- 三十一 阪下圭八氏『皇子・皇女の相聞』（『解釈と鑑賞』第三十六巻第十一号、昭和四十六年十月、同氏『初期万葉』所収）。
- 三十二 神永あい子氏『但馬皇女論』（『青山語文』第七号、昭和五十二年三月）。
- 三十三 森斌氏（注十二）は、①②③歌について、（穂積皇子を胸に描いての）独詠としての連作であると云ふ。
- 三十四 伊藤博氏『女帝と歌集』初発は『専修国文』創刊号、昭和四十二年一月、日本文学研究資料叢書『万葉集II』所収。本稿では、その後手を入られた同氏著『萬葉集の構造と成立・下』（昭和四十九年十一月）によつた。
- 三十五 久米常民氏『古万葉集』の巻一・巻二（『説林』第二十一号、昭和四十七年十二月、同氏『万葉歌謡論』所収）。
- 三十六 金子武雄氏は、⑥歌について、当時古歌であり、民謡化されてゐたもので、それを子部王も但馬皇女も利用したものとみる（「恋の奴」同氏『万葉・悲劇の中の歌』昭和五十四年四月）。森斌氏（注十二）も同様である。土屋氏『私注』は「国にあらずは」の方が古調で但馬皇女の原作、それを子部王が「里に住まずは」と改めたとするが、いかが。
- 三十七 ⑤歌について、黒沢幸三氏（注五）は、但馬皇女の六月二十五日（旧曆）の命日を意識しての作と云ひ、大伴坂上郎女との婚儀の譬喩歌とみる。また金子武雄氏（注三十六）は、④⑤歌を皇女の没した年の秋の作と云ふ。しかし単なる独詠の季の雑歌であらう。